



- 市民がつくる「銀行」 -

第1回 NPOバンク フォーラム

開催報告

ボランティア・ファイナンスの可能性について熱い議論が展開！

国内初のNPO法人によるNPO向け融資を行う北海道NPOバンクは2002年8月に設立されてから、2年が経ちました。2004年7月末現在での出資額は約4,300万円を超え、福祉、環境、社会教育、など幅広い分野で活躍するNPOなどに対して、資金融資を通して、経営基盤及び事業遂行力の強化に向けて支援して参りました。

この間、全国各地でも「市民系バンク」設立の動きが見られ、市民が作る市民のための「銀行」は広がりを見せています。このほど、北海道NPOバンクの取り組みを広く紹介し、他都府県における市民系バンクの創出や、ネットワークづくりを目指して、7月16、17日の2日間にわたりフォーラムを開催いたしました。北海道クリスチャンセンターで行われたフォーラムでは、「NPOと資金調達」と題して、NPOを取り巻く資金調達の現状と先駆的な取り組みについて、北海道グリーンファンド理事長の杉山

さかゑさんに御講演いただきました。続くパネルディスカッションでは、田尻佳史さん（日本NPOセンター理事兼事務局長）、田中優さん（未来バンク事業組合理事長）、山口郁子さん（中央労働金庫営業推進部次長）、向田映子さん（女性・市民信用組合（WCC）設立準備会代表）をパネリストに招き、「ボランティア・ファイナンスの可能性」について熱い議論が交わされました。



躍進する市民銀行をめざしてー第1回バンクフォーラム総括ー

北海道NPOバンク理事長 杉岡直人

全国に次々と立ち上がる市民バンクがさらに大きな波となって市民事業を後押しするために、今回のバンクフォーラムがセットされたといつてよい。バンク事業が軌道に乗るまでには何が必要なのか、NPOや市民はどうかかわることになるのか、行政はどのような役割を想定することになるのか、金融機関はどのような対応を進めようとしているのかといったすぐ手に入れたい情報は、適切な話題提供者によって、その活用のヒントが与えられる。

北海道NPOバンクが主催となって企画したのは、全国に先駆けてNPO対象の資金支援を取り組んできた自負にもとづき、日本中に市民バンク運動を拡大させるチャンスを活かしてイベントを仕掛けるという意図にあった。幸いにも市民金融の先達者として知られる代表的な事業者から報告者を迎えることができた。市民がやる意義を見いだしたものをすかさず応援する。しかも応援したい相手は自分たちの責任で選ぶ、選ばなくてはならないことの基本原則が参加者にピンときたと思う。市民と市民の真剣勝負に必要なのは、意欲と綿密な企画が同時に用意されていなくてはならない。

未来バンクの田中理事長は、市民金融の過激派的存在であるがユーモアあり、話術も巧みでお金の意味についても参加者に鋭く問題提起をして頂いた。WCC（女性市民バンク）代表で信用組合設立をめざす向田さんは、目的も明解、主張も明解な戦闘家（金融庁とまともにやりあうという意味で）であり、頼りになる市民銀行のモ

デルのような取り組みを示して頂いた。労金の山口さんも檄を飛ばし、日本 NPO センターの田尻さんも市民銀行のありがたみに示唆的なアドバイスを提供してくれた。



市民銀行の本質は、お金を市民に取り返す、市民が活用できる資金を市民が応援するという仕組みを作り出すことになる点にあり、まさにローカルガバナンス（地域の自主統治）が具現化される道を拓いていくというメッセージを会場の参加者に共有されるウエーブを感じたフォーラムであった。主催者として次回のフォーラムに参加者の誰かが手を挙げることを確信した2日間であった。

分科会

7月17日には札幌エルプラザで5つのテーマに分かれての分科会が行われました。

分科会1 「北海道NPOバンク設立の経緯について」

分科会1は北海道NPOバンクの設立時に実際に関わった行政、NPOの関係者を交えてのセッションが行われました。北海道NPOバンクが始動するまでには、資金面でNPO団体等をサポートする組織の必要性について、関係者の共通した思いがあり、それが3ヶ月という凄まじいスピードで立ち上げる原動力になったことが、当時設立に携わった関係者から報告がありました。そして、立ち上げまでには様々なスキームを各種検討し、融資の審査の方法など細部に渡って関係者で協議したうえで、現在の体制にたどり着いたいきさつを説明しました。昨今NPO向けに融資を行う金融機関も出てきており、今後はいかに「棲み分け」ができるか、北海道NPOバンクが「北海道モデル」となるべく様々なアプローチをしながらPRしていくことも必要なのは、といった意見が出されました。（佐藤隆）

分科会2 「NPOバンクの運営」

バンクフォーラム分科会2「NPOバンクの運営」は、集まったのは、やる気のあるメンバー11人で、話題は一気に具体的な話し合いに入る。未来バンクは、最初どうだったのか。20人の出資で400万円（100万が3人）17人で100万円だった。現在は400人で1億3千万。田中理事長曰く、無理せず始めて10年かけてブランド力がつくという姿勢が大事であり、やりたいことをやるという主義主張を明確にしている。例えば、借ることがプライドとなり、借り手が自分で宣伝しているという現象が生じている。環境問題、市民事業、福祉に関する取り組みに融資をおこなう。肝心なことは、専従をおかず、おかないでやれる範囲で事業をおさえる。理由は、融資で収益を上げる目的はもたないから。貸し付けは、貸し付けは出資総額の1/10という考えに立ち、必要額（申請額の評価）の50%を融資する。収益率が3%しかなければ、利息3%を支払うと相殺されるので、採算がとれるかどうかを重視して無理に貸さない。NPOバンクの基本方針として考えなくてはならないのは、少額の出資者を多く確保して定期的に追加出資を募る方策が確実に資金力と信用力を高めることにつながる。



話題は、NPOバンクの運営を守る話にまで発展し、中間法人を活用する裏技を田中理事長に解説してもらい、最後には、貧困層を対象にした世界初の少額無担保融資の実践をしているムハマドユヌス氏のグラミン銀行が、マイクロファイナンスのサラ金化現象を引き起こし、借金を抱え込む傾向が生じていることにも注目しなくてはならないというグローバルな視点でのNPOバンクの運営論議に発展した。メンバーの中には、WCSの関係者やマイクロクレジットの研究をしている者あり、金融を専門にする大学関係者あり、NPOバンクを旗揚げする予定者ありで、突っ込んだ議論に2時間が飛びように過ぎていった。（杉岡直人）

分科会3 「融資審査と融資後のフォローアップについて」

この分科会では、前半においてコーディネーターの畑山審査委員による融資審査の現状と問題点について概括的な報告とパネリストの上野審査委員長による審査体制と業務内容についての詳細な説明が行われた。

小休止後のプレゼンターの安田審査委員による金融機関の立場からの融資審査に関する問題提起とパネリストの佐藤審査委員による書面審査の限界等についての所感の披露に続く質疑応答では、融資判定表の作成の経緯と質的側面の点数化の困難性、審査委員の選べられ方と融資を受けた団体が審査委員になることのメリットと秘守義務の問題、数字だけによる審査の限界と信頼関係に基づく返済能力の評価、遅延管理などフォローアップと事務体制、といった論点を取り上げられたが、参加者の共通の主たる関心は、NPOバンクに相応しい融資審査のあり方に向けられた。NPOの発展により積極的に貢献し得る融資審査は如何にあるべき

か、という基本的課題が再確認されたものといえる。(畑山紀)

分科会4 「借り手から見た理想のNPOバンク」

分科会4は、北海道NPOバンクが設立されてから2年経ち、その活動の成果と課題を探り、活動を充実するために、借り手側から北海道NPOバンクを評価してもらう趣旨で開催された。北海道NPOバンクはNPO金融の最後の貸し手として非常にありがたい存在という、借り入れ実績のある3団体の話から始まった。しかしながら、年4回の融資受け付け、札幌での審査面接、200万円という融資金額の上限、最長1年間の返済期限、など、特に資金需要の大きい事業型NPOの借り手側から、現行の融資体制の課題を指摘された。貸し出し資産や運営体制が不十分であり、融資金額が大きく、長期借り入れはNPOバンクでは対応しにくいので、労金や信金など地域の金融機関がNPOへの融資に取り組んで欲しいと、コーディネーターから話題を振ったところ、労金としては積極的にNPOへの融資を進めているという言葉を出席者からいただいた。今後は、地域全体でNPOへの金融システムを確立しなくてはならないこと。そして、NPOへの地域金融システムが確立された後の北海道NPOバンクの役割としては、借りたいときに簡単に借りられる、小回りのきく短期小口資金の融資サービスを拡充すべきではないか、という結論で分科会4は締めくくられた。(河西邦人)

分科会5 「拡がる市民金融」

分科会5はセクターを越えて拡がる市民金融を考えるセッションでした。フロアからご発言いただいた参加者のみなさんのご所属も、企業・行政・NPO...とさまざま、時間があつという間に過ぎ去ったような気がします。

コーディネーターとして印象に残る論点のひとつは、市民ベースの「銀行」の情報開示のことでした。「誰が、どんな目的で、いくら借りているか」情報を、氏名を含めてインターネット等でどんどん情報公開することで、制度の透明性を高めることができる。また、そのことが出資者の思いがどんなかたちで実を結んでいるか知らしめることになり、お金の好循環を生む、という意見が一方でありました。そもそもお金のやりとり自体がセンシティブな情報である。ましてや、いわば「顔の見える」関係である市民間での金融は自ずと情報の扱いに注意を払わざるを得ない、という意見が他方でありました。

また、お金を「貸す」システムと平行的に、お金を「あげる」しくみ、すなわち助成金や補助金の制度が社会のなかで重層的に拡がっていくべき、との思いを強くしました。(樽見弘紀)

フォーラムに参加して

フォーラムに参加した方から、感想をお寄せいただきました。

吉田 敏秀 (大学院生)

NPOバンクについては、その存在は知っていたものの、具体的な活動内容やその仕組みについては、今回のフォーラムに参加し初めて知ることができました。また、全国大会だとは知らずに参加しましたが、パネリストの方の事務所の所在を知り、「バンク」の活動が全国的に広がりを見せ、また、NPOだけではなく、中央労働金庫のような金融機関でも取り組まれているという点や、その仕組みを上手く応用して、風力発電の風車が立ってしまうという、「イチNPO」の活動力というような点で、これからの可能性を感じる事ができました。様々なお話の中で、例えば、自分が金融機関に預けたお金がどの様に使われているのかわからなく、それなら、ある特定の目的の為に使って欲しいと「信託」するようなお金の預け方が必要であるのではないかと。というような事が言われていましたが、まさに必要な「市民の意識」なのではないかと思いました。しかし、それがすぐにNPOバンクに出資する事につながるかというと、そうではないと思いました。今、なぜ自分が銀行に預けているのかと考えると、第一は、いつでも引き出せるという利便性なのではないかと思いました。そういった意味で、生活に直結したシステムになるには難しく、なかなか一般に浸透するのは難しいと思いました。



しかし、それは「NPOバンク」というネーミングから、既存の銀行などの金融機関と比べてしまう事がそもそも間違いなのではないのかな、とも考えられるのではないかと思いました。NPOバンクに預ける場合、預金というよりは、「出資」・「投資」・「寄付」といったような側面が強いのではというイメージがあります。そもそも「バンク」は、お金を預けてそれを増やす事が目的ではなく(現在の銀行ではそれほど増えませんが)、その預けたお金を利用した、社会での活動によって、なんらかの利益を期待するものだとして理解しています。「バンク」にとっての競争相手は既存の金融機関ですが、市民にとって「バンク」と金融機関は、どちらに預けようかと選択する際に、預ける目的がちがうのですから同列に並ぶものではないように思いました。

NPOが活動していくうえでの金銭的な側面を支える、制度・システムというのはまだまだ乏しいのが現実です。寄付に税をかけ

なかったり、寄付した分、国に払う税を控除したりといった、その側面でのシステムが成り立つと、NPO の活動も盛んになるとは思いますが、成立したとしてもまだまだ先の事になる事だと思います。そのような意味で、現在の「バンク」の役割は大きなものだと感じました。

長谷川 武史（大学院生）

今回フォーラムに参加して、全国的にNPOバンクの活動が広まりつつあることを、初めて知った。2日間参加させていただき、疑問に感じたことがいくつか出た。まず、北海道NPOバンクの活動の紹介の中で、融資を受けるNPO団体に対して、返済計画の指導を行っていたという説明があった。福祉活動目的のNPOでは、福祉現場の人が当事者であり、経理などの財政上能力が低いことが多いと思う。そのような団体を支援し、NPO全体の質の向上をNPOバンクが担っていく道もあるのではないかと感じた。ただ資金を提供する立場にあるバンクが、NPOを指導するという形に制度上の不安を感じる。次に、NPOバンクとしての資金確保の困難さを感じた。日本の風土として、資金提供を寄付という形で行っていくことに限界があるのではないかと思った。私的な経験だが、私は学部時代、YOSAKIソーラン祭りの学生実行委員会に所属し、活動していた。学生はボランティアとして、大通り公園のステージを自ら集めた資金により独自に運営していた。資金は札幌市内の企業へ、協賛という形で集めたが、その見返りとして毎年発行している、ガイドブックへの広告掲載と、お祭り会場で配布するウチワに企業名を掲載するという形をとっていた。学生実行委員会の上部組織である、祭り全体を組織する場所では、ロゴを作成し、それを協賛してもらった企業へ使用許可を出し、CM等への使用をおこなってもらうという形をとっていた。

NPOバンクの現在の状況では、出資者への返戻金は困難なものがあると思う。今後も継続的にバンク自体の資金を確保するには、広告掲載やロゴの提供による広報活動による協賛というかたちで行っていくのもひとつの可能性として現実的ではないだろうか。

またNPO全体について言えることであると思うが、寄付という行為が日本では一般的ではなく、資金確保が今後の大きな課題といえる。イギリスなどでは、NPO全体の活動費のうち寄付によるところが大きな割合を占めていると聞いた。二日目の分科会の話の中で、遺贈の話が出ていた。現在は、国税庁が認定したNPOへの寄付にのみ、寄付した個人や団体への税制控除がされているが、その認定NPOの数は少なく、NPO全体の資金確保には役立っていない。制度の改正を行うことによって、富裕層だけではなく中流層からの寄付も増えてくるのではないだろうか。

実行委員会事務局から

フォーラムには当初の予想をはるかに上回る大勢の方に御参加いただきました。また、準備にあたっては、ボランティアをはじめとする沢山の方々、団体にご協力いただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

北海道NPOバンク第7回融資決定

第7回の融資審査が終了し、1団体のNPO法人に150万円の融資が決定しました。

2004 NPOバンク融資申込みのお知らせ

第9回融資 申込期間 10月20日～11月7日 / 融資実行12月中旬
第10回融資 申込開始 1月19日～2月3日 / 融資実行3月中旬

NPOバンク活動報告

8月14日(土)に石狩湾新港で開催された、RIGING SUN ROCK FESTIVAL2004 in EZO(ライジングサンロックフェスティバル)内のECO-ROCK FIELD内ステージで、北海道NPOバンクの活動を紹介しました。

お知らせ

サポート便りに掲載を希望する手記・情報がありましたら、下記問い合わせ先までご連絡願います。
また、NPOバンク事業組合にご加入の方で、住所等に変更があった場合はお手数ですが事務局まで御連絡ください。

NPOバンクに対する問い合わせ先・資料請求先

〒060-0062 札幌市中央区南2条西10丁目 クワガタビル2F 北海道NPOサポートセンター内

TEL:011-204-6523 FAX:011-261-6524 npobank@npo-hokkaido.org http://npo-hokkaido.org/bank_hp/index.htm